

武庫川女子大学附属幼稚園における研究実践報告
—— 保育実践の質を高め合う園内研究体制の確立を目指して ——

Research Practice Report at Mukogawa Women's University Kindergarten:
Aiming to Establish a Research System that Enhances the Quality of Childcare Practices

小尾 麻希子, 金光 文代, 廣崎 有美, 淺川 遥, 川村 美悠
塩井 敬子, 豊田 恭子, 西村 幸子, 藤川 雄太, 遠藤 晶
神原 一之, 久米 裕紀子, 中井 光司, 西本 望

OBI Makiko, KANEMITSU Fumiyo, HIROSAKI Yumi, ASAKAWA Haruka,
KAWAMURA Miyu, SHIOI Keiko, TOYODA Kyoko, NISHIMURA Sachiko,
FUJIKAWA Yuta, ENDO Aki, KANBARA Kazuyuki, KUME Yukiko,
NAKAI Koji, NISHIMOTO Nozomu

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第 18 号 2023 年

武庫川女子大学附属幼稚園における研究実践報告

—— 保育実践の質を高め合う園内研究体制の確立を目指して ——

Research Practice Report at Mukogawa Women's University Kindergarten: Aiming to Establish a Research System that Enhances the Quality of Childcare Practices

小尾麻希子*, 金光文代**, 廣崎有美**, 浅川遥**, 川村美悠**
塩井敬子**, 豊田恭子**, 西村幸子**, 藤川雄太**, 遠藤晶*
神原一之*, 久米裕紀子*, 中井光司*, 西本望*

OBI Makiko*, KANEMITSU Fumiyo**, HIROSAKI Yumi**, ASAKAWA Haruka**
KAWAMURA Miyu**, SHIOI Keiko**, TOYODA Kyoko**, NISHIMURA Sachiko**
FUJIKAWA Yuta**, ENDO Aki*, KANBARA Kazuyuki*, KUME Yukiko*
NAKAI Koji*, NISHIMOTO Nozomu*

要旨

本稿では、令和3年度の武庫川女子大学附属幼稚園において推進された園内研究の成果と課題について報告する。ここでは、「幼稚園教育要領」の改訂を受けて再編成した期の指導計画及び同大学教育学科教員（「附属幼稚園連絡会」）の出席のもと、令和3年11月に実施した研究保育と事後研究会における協議内容を中心に報告する。研究保育（異年齢による協同的な遊び「あきの わくわくどつきらんど たいむ」）を中心に検討した結果、附属幼稚園における研究と実践の成果として見出されたのは、(1)学級の枠を外した異年齢による遊びの構築と教師の協働、(2)幼児のイメージや思い、考えを出発点とした保育実践の構築、(3)言葉による伝え合いの充実と応答的な人間関係の育成、(4)幼児同士で共有するイメージや考えに基づいて遊びを創り出していこうとする心情・意欲・態度の育成の4点である。今後の課題は、(1)幼児一人一人の思いや考えに基づいた環境構成・援助を確実化させ得る保育体制の確立と教師の協働性の向上、(2)好きな遊びにおける活動と学級活動との連関を意図した保育内容の構築にある。

1. 背景

保育制度の多様化が進む状況下において、子どもの発達段階に応じた質の高い教育・保育を全ての幼稚園・こども園・保育所において提供することは、近年のわが国において実現すべき極めて重要な課題である。この課題に対応するために、近年、幼児期の教育・保育を担う保育者の専門性や経験と、研修等によりその専門性の向上を図ることの重要性がますます指摘されるようになってきた。例えば、中教審答申（平成27年12月）では、これからの時代の幼稚園教諭に求められる資質能力として、(1)幼稚園教諭として不易とされる資質能力、(2)新たな課題に対応できる力、(3)組織的・協働的に諸問題を解決する力の3点が挙げられている⁽¹⁾。

幼稚園教諭に不易とされる資質能力とは、「幼稚園教育要領」に示す教育内容（5領域）に関する専門知識を備えるとともに、その教育内容を指導する力、具体的には幼児を理解する力や指導計画を立案し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力など、幼児期の学校教育を実践していく専門家としての側面である。また、近年は幼稚園における子育て支援も多様化していること

から、専門機関と連携を図りながら各家庭の実態に即して支援できる力も必要となる。さらに、質の高い教育・保育を実現するには、多様な専門性をもつ人材との効果的な連携を図りつつ、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力を醸成するとともに、カリキュラム・マネジメントを確立させていくことも求められる⁽²⁾。

以上のことを背景に、武庫川女子大学附属幼稚園（以下、附属幼稚園と略記）では、同園教員と武庫川女子大学教育学部教育学科教員（6名）とで組織される「附属幼稚園連絡会」の取組を充実させてきた。年間3回にわたって開催される「附属幼稚園連絡会」では、附属幼稚園の現況や課題、研究の進捗状況等について協議を重ねた。また、研究保育・事後研究会には大学教員も参加し、研究の成果と課題を明確にした上で、保育の目標達成へと向かう具体的な方途について協議を重ねてきた。そこで、本稿では、附属幼稚園において推進された園内研究の中から、令和3年11月に実施した研究保育と事後研究会における協議内容を中心に報告する。このことを手がかりに、保育実践の質を高め合う園内研究体制の確立へと向かう同園の研究の成果と課題について明示したい。

* 武庫川女子大学（Mukogawa Women's University）

** 武庫川女子大学附属幼稚園（Mukogawa Women's University Kindergarten）

2. 平成30年度～令和2年度の園内研究

(1) 研究の概要

令和3年度の研究の基盤となったのは、平成29年3月の「幼稚園教育要領」改訂を受けて推進した平成30年度の教育課程及び月別指導計画の再編成である。表1は、その再編成の際に試作された指導計画を基礎に、実践に基づいて改善してきた令和3年度の「5歳児V期指導計画」である（令和3年度より、期別の指導計画へと改めた）。指導計画を再編成するにあたって、私たちが特に留意したのは次の3点である。第1に、「幼稚園教育要領」に示された「幼稚園教育において育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、10の姿と略記）の趣旨を踏まえた計画とすること、第2に、その資質・能力及び10の姿を見通した上で、従来の指導計画に表された保育内容を5領域の側面から再検討すること、第3に、カリキュラム・マネジメントにつながる計画とすることであった。そこで、期別指導計画においては、まず、幼児の育つ方向である総合的な「ねらい」を設けた上で、その「ねらい」と「幼稚園教育において育みたい資質・能力」との関わりを明示した。次に、資質・能力と保育内容（5領域）との関わりを明示した。さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を位置づけ、その姿と環境構成・援助との関わりを意識化できるようにした。

平成29年度から取り組んできた以上の教育計画研究を基礎に、令和元年度には、研究テーマを「幼児期に育ってほしい姿につながる遊びの中の学びとは」と設定して研究を進めた。この年度の研究では、主として、保育実践において捉えた幼児の姿を「エピソード記録」に記し、そこでどのような学びが創出されているのか、10の姿の視点から考察することを積み重ねた。保育カンファレンスでは、各教師の記した「エピソード記録」を持ち寄り、その記録に基づいて、幼児一人一人の学びの様相に応じた環境構成と教師の援助の方向性を探っていった。令和2年度には、研究テーマを「豊かに感じ、生き生きと遊ぶ子どもの育成ー遊びの中の学びを探るー」とし、幼児の学びと環境構成・教師の援助との関係性を明示した「エピソード記録」へと改め、記録に基づく保育カンファレンスを蓄積した。

(2) 研究の中で見えてきた新たな課題

以上のように、令和元年度・2年度の研究においては、幼児一人一人によって相違する学びの様相とその個人差に応じた環境構成・教師の援助方法の解明に力を注いだ。一方、その過程で、幼児一人一人の感動体験や気づきなどが個人の内に留まらず、仲間と響き合い、協同的な学びへと深化していく保育実践をいかに創造するのか、という新たな研究課題にも突き当たった。そこで、次年度

の研究においては、協同的な遊びが創出され、深まりゆく過程における教師の具体的な援助について、各学年の幼児の育ちに応じて解明していくこととした。

3. 令和3年度の園内研究

(1) 研究テーマと研究の方法

以上のことを踏まえ、令和3年度には、研究テーマを「豊かに感じ、生き生きと遊ぶ子どもの育成ー自分らしさを発揮し、友達と響き合う援助を探るー」と設定して研究を推進した。研究の方法については、これまでの方法を踏襲し、(1)協同的な学びの過程と環境構成・教師の援助の関係性を明示した「エピソード記録」と記録に基づいた保育カンファレンスの蓄積、(2)事前研究会・研究保育・事後研究会の実施、(3)保育実践に基づいたカリキュラム・マネジメントとしたが、特に(2)については、「附属幼稚園連絡会」とのより一層の連携のもとに充実させていくこととした。そこで、本稿においては、「附属幼稚園連絡会」所属の教員出席のもと、令和3年11月15日に実施した研究保育「あきの わくわくどっきりらんどたいむ」と事後研究会における協議内容について報告することとする。

(2) 研究保育の実際

① 保育実践の概略

- ・実施日時：令和3年11月15日(月)9時15分～11時
- ・研究保育実施学級：4歳児ばら組・きく組、5歳児ふじ組・さくら組
- ・保育の主題：「あきの わくわくどっきりらんどたいむ」
- ・遊びの経過と保育の「ねらい」

「あきの わくわくどっきりらんどたいむ」とは、4・5歳児で構成されたグループ（8グループ・1グループ8～10名）で、自分たちの思い描く店屋作りについて話し合い、遊びに必要な準備を整え、店屋ごっこを展開するという異年齢による協同的な遊びである。この異年齢での遊びが構想された背景には、4月当初より4・5歳児でペアをつくって取り組んできた「仲良し遊び」や栽培活動など、日常より大切にされてきた異年齢交流活動がある。また、店屋ごっこが構想された背景には、園庭のケヤキの葉を集めて、「葉っぱのおふろ」を作って遊んだ昨年度の経験から、園庭の樹々の葉を集めては、今年は「葉っぱのおふろだけでなく、“葉っぱのおんせんやさん”を作って遊びたい」という期待と遊びへのイメージを膨らませる5歳児の姿があった。

店屋ごっこの準備を進めるにあたって、教師と幼児で話し合った結果、開店する店屋は、8種類（フォトスタジオ・お菓子屋・おもちゃ屋・ごはん屋・おはなしやさん・アクセサリー屋・宝探し・葉っぱのおんせんやさん）に決定された。研究保育当日には、店屋の開店準備に向

表 1 5 歳児 V 期指導計画 (10 月下旬から 12 月)

行事	重点的に取り組む保育内容	幼児の姿	第 V 期のねらい
<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語教育 ・ 全園児園外保育 ・ 誕生会 ・ 丹嶺学苑研修センター園外保育 ・ 園外保育 ・ クリスマス会 ・ 音楽会 ・ 避難訓練 ・ アゼリアランチ ・ 附属中高・保育園との交流会 ・ 身体計測 ・ 衣替え ・ 2 学期終業式 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 菜園の栽培物を収穫したり、チューリップの球根を植えたりする。 ・ 友達とイメージや遊びの目的を共有しながら、お店屋ごっこなどの協同的な遊びを一緒に進める。 ・ 秋の自然との関わりを深めたり、自然物(ドングリ、木の葉、落葉)を遊びに取り入れながら創意工夫して遊ぶ。 ・ 友達とイメージや考えを合わせて歌ったり、楽器遊びをしたりする。 ・ クリスマスへのイメージを広げながら、木工ツリー制作や靴下作り、クリスマスツリーの飾り付けなど、身近な植物の生長に気づき、友達や教師に知らせたり、疑問に思ったことを調べたりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 園外保育に出かけたり栽培物を収穫したりして秋の自然にふれながら、秋の自然への興味を広げている。自然物遊びに取り入れ、友達と工夫して遊びを進めたりする姿も見られる。 ・ 運動会の経験から友達と誘い合ったり運動遊びをし、身体を十分に動かしたり、友達とルールや作戦を考えたりしながら遊ぶことを楽しんでいる。様々な運動用具に取り組み、目標を決めたり友達の思いを高め合ったりして遊んでいる。 ・ クリスマスへの夢を語り合ったり合奏をしたりして遊んでいる。木工制作では、のこぎりや金槌を使い、自分の作りたい木をイメージして作っている。 ・ 気温の変化や風の冷たさ、身近な植物の生長に気づき、友達や教師に知らせたり、疑問に思ったことを調べたりしている。 	<p>第 V 期のねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 様々な活動に取り組む中で、友達とイメージを広げながら遊ぶことを楽しむ。 ○ 友達とイメージや考えを伝え合いながら、いろいろな方法で表現する楽しさを味わう。 <p>知識及び技能の基礎 (遊びや生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気づいたり、何ができるようになるか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 友達と共通する目標に向かって、協力しながら一緒に遊ぶ楽しさを感じる。 ○ 自分の思いや感じたことを表現する方法について知る。 ○ 安全に生活するための習慣や行動を知る。 ○ 自然に親しみ、イメージしたことを音やリズムで表現する楽しさを味わう。 ○ 年末の地域の様子や伝統行事に興味・関心を高め、遊びや生活に取り入れ、楽しむ。
<p>学びに向かう力、人間性等 (心情、意欲、態度が育つ中で、いかにによりより生活を営むのか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 目標に向かって自分の力を十分に発揮して遊ぶことを楽しみ、充実感や達成感を味わい、自信をもつようになる。 ○ 興味をもって秋の自然にふれ、自然に関心を深める。 ○ 友達と簡単な分担当をしたり、簡単なメロディを弾いたりして遊び、心一つにして演奏する楽しさを味わう。 ○ 友達と互いの考えのよさを取り入れながら、イメージした物を作ったり表現したりする喜びを味わう。 	<p>思考力、判断力、表現力等の基礎 (遊びや生活の中で、気付いたこと、できようになることなどを使いながら、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするのか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 友達と互いの思いや考えを出し合いながら、遊びを考え、目的をもつて一緒に遊びを進める満足感を味わう。 ○ 友達と目的や課題を共有して遊びながら、考えたり試したりして繰り返し挑戦し、やり遂げようとする。 ○ 秋の自然にふれ、変化に心を動かしたり、遊びに取り入れたり、感じたことを表現したりして遊ぶ。 ○ 感じたことやイメージしたことを友達と伝え合い、表現方法を考えたり創意工夫したりしながら様々な表現活動に取り組む。 	<p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達と目標を共有し、いろいろな技や方法、順序などの作戦を考え、友達と力を合わせたり、競い合ったり遊んだりにすることによって繰り返して取り組む。 ・ 自分の目標に向かって運動遊びに繰り返し取り組みながら、友達と教え合う。 ・ 友達とイメージを共有して役割を決めたり、動きや言葉などを考えたりして、お店屋ごっこをする。 ・ 友達と気持ちを合わせながら歌を歌ったり合奏したりする。 ・ 木の葉や種などを集め、その色や形、大きさなどの特徴を生かして作ったり遊んだりする。 ・ 木片の長さを比べてたり、のこぎりや刃物で切ったりしながら、試行錯誤して木工ツリーを作る。 ・ 初冬の自然にふれ、興味をもつたことや疑問に感じたことを調べたり、調べたことを友達や先生に伝えたりする。 	<p>幼児園教育において育みたい資質・能力の観点から</p> <ul style="list-style-type: none"> 健康 人間関係 環境
<ul style="list-style-type: none"> ・ 力いっぱい走ったり、跳んだり、投げたりして遊ぶ中で、自分の力を発揮する。 ・ 園外の自然の中で、のびのびと身体を動かして遊ぶ。 ・ 友達と誘い合ったり、遊びの目的を共有したりしてルールのある遊びをする。 ・ 異年齢の友達と一緒に様々な栽培物を収穫し、年下の友達に優しく丁寧に声をかけたり関わったりする。 ・ 自分の得意なことを生かしたり、友達のよさを取り入れたりしながら一緒に遊ぶ面白さを感じ取る。 ・ 栽培しているサツマイモや野菜の生長や、菜園の柿の実などに気づき、年少児と一緒に収穫することを楽しむ。 ・ 釘や金槌、のこぎりを使って、自分のイメージした木工ツリーを作る面白さを感じ取る。 ・ 吐く息の白さや風の冷たさ、霜など、初冬の自然現象に興味をもつて見たり、友達と伝え合ったりする。 	<p>幼児の発達を捉える視点</p> <ul style="list-style-type: none"> 健康 人間関係 環境 	<p>健康</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 園外保育の約束やマナーを知り、安全に行動する。 ・ 手洗いやうがいなど、冬の健康的な生活に必要な習慣を身に付ける。 ・ 避難訓練を通して災害が起きた時の身の守り方を知る。 ・ 運動遊具を使った遊びを継続して行う。 ・ 友達と力を合わせた競い合ったりして遊ぶ中で、友達の頑張っている姿を認めたり、応援したりする。 ・ 友達とアイデアや意見を出し合い、そのよさに気づいたり受け入れたりしながら遊びを進める。 ・ 遊びのイメージを共有しながら必要な用具や道具の使い方が分かり、目的や用途に応じて使う。 ・ のこぎりや金槌の使い方に慣れ、木片を組み立てる。 ・ 正月や日本の古来の文化の由来について知り、友達や先生と一緒に新年を迎える準備をする。 	<p>環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 菜園の栽培物を収穫したり、チューリップの球根を植えたりする。 ・ 誕生会 ・ 丹嶺学苑研修センター園外保育 ・ 園外保育 ・ クリスマス会 ・ 音楽会 ・ 避難訓練 ・ アゼリアランチ ・ 附属中高・保育園との交流会 ・ 身体計測 ・ 衣替え ・ 2 学期終業式

<p>幼児の発達を捉える視点</p>	<p>言葉</p> <p>表現</p>	<ul style="list-style-type: none"> 遊びの中で、自分の考えを意欲的に友達に伝えようとして友達の意見を受け止めたり、遊びを進めていく中で必要な言葉を知ったりして、ごっこ遊びに必要なものを作る。 遊びや生活の中で、文字や記号を使って自分の思いを表したり、人に伝えたりする。 自分のイメージしたことを工夫して描いたり作ったりする中で、材料・用具の使い方や接着方法について知る。 リズムや強弱などに意識しながら、友達と演奏したり、鍵盤ハーモニカで知っている曲の簡単なメロディーを弾いたり、音楽に合わせて打楽器で演奏したりする。 来年の干支について話を聞いたり、いろいろな技法を使って干支を作ったり描いたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 秋の自然を見つけたら、触れたりして、気付いたことや感じたことを友達と言葉で伝え合う。 共通の目的をもって話し合ったり役割分担したりする中で、相手の話を注意して聞いたり、自分の意見を相手に分かるように話したりする。 秋の自然物やいろいろな材料、用具を使い、友達と一緒に遊びに必要な物や場を工夫する。 秋の自然の中で感じたことやイメージしたことなどを身体や言葉で工夫して表現したり、友達と動きを創り出したりする。 打楽器や鍵盤ハーモニカなどを使って演奏する方法を考えたり試したりする。 	<p>評価の観点</p> <p>周囲の環境に興味や関心をもち積極的に働きかけ、見通しをもって粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待をもちながら、次になげる「主体的な学び」ができていくか。</p> <p>他者と関わりを深める中で、自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める「対話的な学び」ができていくか。</p> <p>直接的・具体的な体験の中で、「見方・考え方」を働かせて対象と関わって心を動かす、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返して、生活を意味あるものとして捉える「深い学び」が表現できているか。</p>	<p>環境構成(☆)及び教師の援助(○)</p> <p>☆色や形の面白さに気付いたり、種類や数値などに興味や関心をもちたりできるように、集めた木の葉や落葉、枝などの自然物を分類して遊ぶ場を設ける。</p> <p>○収穫したサツマイモの大きさを比べたり、ドングリなどの木の実の形ごとに分けたりして、数や量、形などに興味をもてるようにする。</p> <p>また、幼児がしていることや気付いたことを受け止め、学級の話題にして関心が広がるようにする。</p> <p>○幼児が不思議に思ったことなどは、絵本や図鑑を活用しながら教師と一緒に調べたり、学級の場で伝え合ったりして深めていく。</p> <p>○秋から冬にかけての自然に気付けるように自然にふれる機会を多くもち、幼児の発見や驚き、感動に共感したり、そこからイメージを広げて、身体や音楽で表現することなどを楽しめたりする。</p> <p>☆大型の段ボールや積木、空き箱や巻き芯などの材料を幼児の扱いやすいように準備しておいたり、友達とイメージや遊びの目的を共有して継続的に遊ぶように場を残したり、片付け方を工夫したりしていく。</p> <p>○友達と一緒に描いたり作ったりする過程で、いろいろな表現方法を試したり、いろいろな組み合わせができるような道具や材料などを幼児と一緒に準備する。</p> <p>○素材の特性を知り、自分なりに工夫して作ったクリスマスツリーを友達と見せ合ったり、認め合ったりしながら、作ることへの喜びや自身に繋げられるようにする。</p> <p>○異年齢児と関わって遊ぶ中で、年下の友達に遊び方を教えたり、一緒に楽しめるように働きかけ、年長児としての自覚や自信をもてるようにする。</p> <p>○遊びを進めていく中で自分の思いが相手に伝わるように話したり、相手の気持ちに気付いたりできるように、自分たちで遊びを作る必要に応じて仲立ちをする。</p> <p>○友達と一緒に目的を実現しようとする姿を支え、幼児一人一人が遊びの中で自分の考えを十分に表出できるようにして、自分たちで遊びを作り上げる楽しさを感じられるようにする。</p> <p>☆幼児一人一人の気持ちや課題などについて、十分に話し合えるように、じっくりと伝え合う場を設ける。</p> <p>○イメージを広げるのびのびと取り組んでいる様子に共感しながら、達成できる喜びが感じられるように認めたり励ましたりする。</p> <p>☆いろいろな打楽器や鍵盤ハーモニカを整理して準備しておき、楽器の使い方や音色、音を合わせる美しさに気付くような言葉かけをする。</p> <p>○楽器の扱い方を確認したり、曲に合わせて演奏したりして、友達と気持ちを合わせて演奏する楽しさや一体感を味わえるようにする。</p> <p>○教師も一緒に大掃除をしたり、年末年始の過ごし方を知らせたりして、新年を迎える気持ちをもちつつ過ごす。</p>	<p>幼児期の終わりまでに育ってほしい姿</p> <p>健康な心と体</p> <p>自立心</p> <p>協同性</p> <p>道徳性・規範意識の芽生え</p> <p>社会生活との関わり</p> <p>思考力の芽生え</p> <p>自然との関わり・生命尊重</p> <p>数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚</p> <p>言葉による伝え合い</p> <p>豊かな感性と表現</p>	<p>家庭・地域との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 附属保育園との交流会に参加し、同年齢の幼児とふれ合ったり話をしたりして積極的に関わる。 附属中学校・高等学校の交流会に参加し、生徒と一緒にサツマイモ掘りをする。 保護者との個人懇談では、幼児の様子や課題などについて話し合い、家庭と連携して就学までを過ごしていきけるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 食物学科との食育ノートを実施したり、食育講話に参加したりする。 健康スポーツ学科の先生に幼稚園での運動遊びの様子について伝える機会をもち、幼稚園での幼児の生活や発達に即した活動内容を大学との連携のもとに考えていく。 栽培活動では、教育学科の先生に育て方を教わったり、学生と一緒に苗植えをしたりする機会をもつ。
--------------------	---------------------	---	--	---	--	---	---	--

けた話し合いや品物作り、チケット作りなどが行われた。時には、他の店屋に出かけて買い物をしたり温泉に入ったりするなど、客となって遊ぶ姿も見受けられた。各グループには活動の拠点となる保育室があり、そこで日々遊びを継続している。なお、グループは4月当初より4・5歳児でペアをつくって遊んできた幼児で構成されている。

この遊びでは、異年齢の友達の思いに気付きながら共に遊びを創り出していくという趣旨のもと、「ねらい」を以下のように設定した。

【「あきの わくわくどっきりらんど たいむ」の「ねらい」】

〈4歳児〉

- 異年齢の友達と互いの思いや考えを出し合いながら一緒に遊ぶ楽しさを味わう。
- 友達と共通のイメージをもってやりとりをしながら遊ぶことを楽しむ。

〈5歳児〉

- 年下の友達と関わりを深めながら主体的に取り組む。
- 友達とイメージを共有し、共通の目的に向かって協力しながら遊びを楽しむ。

「あきの わくわくどっきりらんど たいむ」の実践について、本稿では、「葉っぱのおんせんやさん」と「フォトスタジオ」の2つの遊びを取り上げ、報告することとする。

② 「あきの わくわくどっきりらんど たいむ」の実際

ア. 実践事例1：「葉っぱのおんせんやさん」

「葉っぱのおんせんやさん」の準備は、園庭に舞い降りたケヤキの葉を熊手でかき集めるところから始まる。お客さんに喜んでもらえる心地よい温泉を作るという目的に向かって、集めた葉はフルイにかけ、砂を取り除いた上でタライに入れられる（写真1）。温泉作りへの期待を膨らませながら園庭に舞い降りてくるケヤキの葉をたくさんの集めることが、この遊びの原点であった。そこで、教師は、幼児の手で扱いやすい小さな箒や熊手、塵取り、フルイ、バケツなどを環境として整えた。研究保育においても、これらの環境は、幼児の遊びの動線に添うように構成した。



写真1 葉っぱを集めよう

5歳児にとっては、昨年度も経験した遊びであったことから、比較的早い段階で、「温泉の入口を作ろう」「チケットも作ろう」などと、温泉作りに期待を寄せる姿が見受けられた。ここ数日は、旗立台やスズランテープ、紅葉した葉など、身近なものを用いて、温泉の入口作りに取り組んでいる（写真2）。さらに、この日には、チケット作りや「しゃんぷー」と「とりーとめんと」の準備が整えられた（写真3・写真4）。ドングリを持参した幼児には、「おんせん」と書いたチケットを手渡すこととしている。「しゃんぷー」と「とりーとめんと」の使い方は、お客さんを迎える前に、5歳児から4歳児に伝えられた（写真5）。このように、「葉っぱのおんせんやさん」では、開店に向けて必要な物を作ったり、作った物で遊んだりすることを楽しみながら、子どもたちの遊びへのイメージは日々膨らんでいる様子であった。教師は、日々表れてくる幼児一人一人の思いや考えを受け止め、思い描いていることを伝え合い、それを実現する方法を幼児同士で考え合う場を意図して設けてきた。



写真2 温泉の入口をつくろう



写真3 ちけっとはこちら

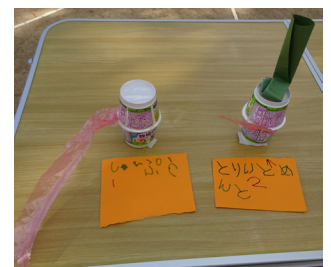


写真4 「しゃんぷー」と「とりーとめんと」



写真5 このように使うよ

温泉開店後は、お客さんとなってやってくる友達を迎え入れ、ドングリとチケットの交換や豆絞りの手渡し、温泉への

案内など、幼児一人一人が「おんせんやさん」としての役割を担った。この日の遊びでは、明確に役割分担するのではなく、お客さんの動きや問いかけに応じながら案内したり遊び方を伝えたりするなど、自然な流れの中で、役割が果たされていった（写真6・写真7・写真8）。

実際にお客さんを迎えると、新たな問題も生じてくる。この日の遊びでは、工夫して作った「しゃんぷー」と「とりーとめんと」を使ってくれないお客さんが何人もいたことが話題となった。そこで、教師も介入しながら、この問題に対する話し合いが行われた。「しゃんぷーととりーとめんとをどのようにしたらいい？」という教師の問いかけに対し、幼児からは、入った時にすぐに気付ける場所に置いておくことや、入口から「しゃんぷー」と「とりーとめんと」を置いている場所に行けるように“線をかく”ことが提案された。このように、日々の遊びの中で表れてくる課題を共有し、その解決に向かって考え合い、考えたことを実践して確かめ合うことの積み重ねが、遊びの目的を共有して遊ぶ姿につながっている。



写真6 温泉の入口はこちら



写真7 これを使ってね



写真8 葉っぱのおんせん

うとする姿も見受けられた。なお、作ったカメラや洋服などは、幼児のイメージに添って、日々改良されている。

このように、「フォトスタジオ」では、幼児一人一人のイメージに添い、創意工夫しながらオリジナルのカメラを作り上げていくことが、子どもたちが夢中になって取り組む遊びの原点となっていた。そこで、保育室には、いろいろな形・大きさの箱、ペットボトル、色画用紙、テープ類などが幼児の手で扱いやすいように整えられた。特に、接着材料については、のり・ボンドの他に、セロテープ・布テープ・ビニールテープなども準備し、材料や用途に応じて選択できるように構成された。なお、幼児一人一人の思い描くカメラは一日で完成するものではなく、工夫と改良の積み重ねが必要であったことから、ここでは、幼児同士で作ったカメラを紹介し合ったり、工夫しようと思っていることを伝え合ったりしながら、幼児一人一人の工夫によってカメラが変化していく過程を分かち合うことが大切にされた。



写真9 カメラを作ろう



写真10 記念撮影用の洋服

イ. 実践事例2：「フォトスタジオ」

「フォトスタジオ」では、カメラ作りや撮影時に着用する洋服・帽子作りなど、開店に向けた準備が進められていた（写真9・写真10）。ここでは、いろいろな形の箱や巻き芯、テープを工夫して使いながら、“立体的なカメラ”を作ることが子どもたちの目的となっていた。また、この日には、カメラを置く三脚の必要性に気付いた幼児2人が、箱や丸めた画用紙を組み合わせながら三脚作りに試行錯誤するなど、イメージしていることを友達と伝え合って一緒に作り上げよ

やがて、作ったカメラでグループの友達を撮影したり、他の保育室に向向き、店屋に並べられている商品を撮影したりするなど、他のグループの幼児ともつながって遊ぶ姿も見られるようになった（写真11・写真12）。また、「お菓子屋」の準備を進めている友達から、作ったケーキを撮影してほしいというリクエストを受けて取材をするなど、お客さんとしてやってきた幼児の撮影に留まらない、幼児の発想に基づいた多様な遊びが展開されていた。そこで、教師は、依頼した幼児に撮影してほしいと思った理由を尋ね、幼児の願いや思

いが伝わるように仲立ちをした。撮影を依頼した幼児からは、「本物のケーキと同じぐらいの高さ」にするという目的に向かって、紙粘土や木の実などを試行錯誤しながら積み重ねたことや、「一生懸命になって完成させたケーキを撮影してほしかった」という思いが話された。撮影をした幼児にとっては、友達の思いに応えられたことが大変嬉しかったようである。遊びのイメージや目的を共有し、協同して遊ぶためには、幼児一人一人が持ち味を發揮して遊ぶ中で、友達の思いや考えにふれたり、互いのよさを認め合ったりすることが大切である。



写真 11 につこり笑って！



写真 12 取材に来ました！

③ 「話し合い」の位置づけ

遊びのイメージや目的を共有し、協同して遊びを進めていくには、自分なりの言葉で表現しつつ、友達の思いや考えにも気付き、課題が生じた時には対話を通して、互いの納得解を生み出していくことが求められる。また、自身のグループにおける遊びだけでなく、他のグループの友達が実現しようとしていることや乗り越えようとしている課題にも思いを馳せ、課題解決へと向かう方法を一緒に考え、一体感をもってやり遂げていく過程が大切である。このような趣旨において、「あきの わくわくどっきりらんどたいむ」では、遊びの中における伝え合いを重視するとともに、遊び始める前や片付け後には、学級活動の場における「話し合い」が位置づけられている。例えば、この日、5歳児学級では、片付け後、グループの遊びの中で工夫していることを伝え合ったり、友達の話を聞いて思ったことや疑問に思ったことなどを質

問したりする姿が見られた。例えば、「宝探し」の準備を進めている友達に対して、「宝箱はできた？」「宝の地図は？」と質問するなど、各グループの遊びの状況は、お客さんとして参加した時の体験や話し合いを通して、日々、学級の仲間と共有されているようであった。

(3) 事後研究会において示唆された今後の保育の方向性

研究保育実施後の事後研究会では、保育の振り返りと省察に基づいて、研究協議の重点を「遊びのイメージや目的を共有しながら友達と一緒に遊びを創り出していくには、教師はどのような役割を果たしていけばよいのか」と定め、今後の保育の方向性を探っていった。

実践事例に示したとおり、イメージや目的を共有して遊ぶには、(1)遊びの原点となる活動に充分に取り組むこと、(2)互いの思いや考えを伝え合い、それを実現する方法を考え合うこと、(3)遊びの中で表れてくる課題を共有し、その解決に向かって考え合い、考えたことを実践して確かめ合うこと、(4)幼児一人一人が持ち味を發揮して遊ぶ中で、互いのよさを認め合うことが不可欠である。環境構成・教師の援助においても、これらのことを豊かに誘うものでなければならない。以上のことを根拠に据えた「あきの わくわくどっきりらんどたいむ」の実践は、附属幼稚園で推進してきた園内研究の成果である。

今後の保育の方向として示唆されたのは、第1に、グループ活動と学級活動との連関を意図した保育内容の構築についてである。例えば、4歳児学級では、「葉っぱのおんせんやさん」の遊びを進めている友達からの情報をもとに、学級の皆で「葉っぱのおんせん」を作って遊んだり、「フォトスタジオ」で記念撮影をする際に身につけるものを作ったりするなど、各グループの遊びを知ることによって得た興味を学級全体の遊びとして再構築していくことが可能である。学級の遊びにおいて経験したことや気付いたことは、グループ活動の場で生かされたり、5歳児に伝えられたりして、異年齢で遊びを進めていく礎ともなっていく。異年齢で遊びを創り出していく場合は、特に、各学年の発達に応じた遊びと異年齢での活動とのつながりを考慮して保育内容を構築していくことが求められる。一方、5歳児の学級活動では、例えば、V期の指導計画に位置づけられている「木工遊び」を生かし、店屋の商品を並べる台や店屋構えを木工で作ることも可能である。各々のグループに共通する課題解決や目的達成に向かって、これまでに経験してきたことや学んだことを生かしていくことも5歳児にとっては大切な経験となる。そのため、グループでの遊びと学級活動との連関がより豊かに創出されるような保育内容を構築することが求められる。

第2に、学級活動における伝え合いを豊かに誘う保育体制についてである。学級活動における「話し合い」の中で、豊かな伝え合いが促されるためには、まず、各学級担任によって、学級の枠を外した遊びの時間における幼児の姿や心動

かされた出来事などが把握されておかなければならない。なぜなら、教師の捉えた「エピソード」を伝えたり、そのことに関連する問いかけをしたりすることが、幼児同士の伝え合いを豊かに誘う礎となるからである。「あきの わくわくどつきりらんど たいむ」において、学級担任は、主として、担当するグループの遊びに関わっているため、グループ活動における幼児の姿は、保育終了後の保育カンファレンスの中で共有されている。今後の課題は、担当するグループとともに、他のグループの遊びにも関わり、幼児の姿に基づいた援助がより一層可能になるような保育体制を整えることにある。

4. 園内研究の成果及び今後の課題

以上のように、附属幼稚園では、異年齢でペアをつくって遊ぶことを継続し、その経験を異年齢での協同的な遊び「あきの わくわくどつきりらんど たいむ」へと深化させていった。異年齢の幼児が集い、互いの思いや考えにふれながら共に遊びを創り出していった経験は、各学年の発達に応じた次のような幼児の育ちへとつながっていった。

4歳児の育ちとして挙げられるのは、第1に、異年齢の関わりによって、人への信頼感や思いやりを深めていったことである。4歳児にとって、5歳児の優しさにふれながら一緒に遊ぶ経験は、安心感をもって生活する一助となり、その過程で抱くようになった年長児への親しみや憧れは、3歳児への思いやりある行動へとつながっていった。第2に、作った物を活用して様々なごっこ遊びを展開するなど、友達とやりとりをしながら遊ぶ楽しさを味わうようになったことである。第3に、思い描いたことが本当に実現できるという自信をもつようになったことである。店屋開店に向かって、5歳児と一緒に遊びに必要な物を創意工夫して作り、考えを寄せ合いながら遊んだ経験は、友達と心を通わせて遊ぶ楽しさや自分の力で遊びが創り出せるという自信へとつながり、4歳児の遊びの中に生きている。

5歳児の育ちとして挙げられるのは、第1に、幼児同士の伝え合いが豊かになるとともに、互いの思いや考えに添う納得解を生み出そうとする姿がよく見受けられるようになったことである。こうした幼児の育ちは、店屋ごっこの準備を進める中で、自分の意見を述べたり、友達の意見をよく聞いたりしながら、どのように遊びを進めていけばよいのかを日々話し合っていた成果である。第2に、少人数での遊びの場に留まらず、学級活動における話し合いや協同的な表現遊びなど、学級全体の場における伝え合いと応答的な関わりが豊かになっていったことである。例えば、3学期に行った「泣いた赤鬼」を題材とした劇遊びでは、教師が介入することなく、鬼や村人などの登場物の気持ちを幼児同士で伝え合う姿が見られた。また、登場物になって遊ぶ場では、お話の状況と登場物の気持ちをくみ取りながら、自然な形で会話が弾んでいった。第3に、自分たちの思い描いたことを基に、友達と一緒に遊びを創り出していく楽しさをより一層味わ

うようになったことである。また、「泣いた赤鬼」の表現遊びでは、「赤くんと青くんは出会えたのかな」「優しい気持ちを持てたのかな」などと想像を膨らませ、話の続きを創り出していく姿も見受けられた。

以上のことから、附属幼稚園における研究と実践の成果は、(1)学級の枠を外した異年齢による遊びの構築と教師の協働、(2)幼児のイメージや思い、考えを出発点とした保育実践の構築、(3)言葉による伝え合いの充実と応答的な人間関係の育成、(4)幼児同士で共有するイメージや考えに基づいて遊びを創り出していこうとする心情・意欲・態度の育成の4点にまとめられる。今後の課題は、事後研究会においても示唆されたとおり、(1)幼児一人一人の思いや考えに基づいた環境構成・援助を確実化させ得る保育体制の確立と教師の協働性の向上、(2)好きな遊びにおける活動(少人数の幼児で構成される遊び)と学級活動との連関を意図した保育内容の構築にある。次年度には、以上に明らかにしてきた課題を踏まえた研究を推進し、保育実践の質を高め合う園内研究体制の確立へと向かってさらなる歩みを進めたい。

引用・参考文献

- (1) 中央教育審議会答申「これからの時代の教員に求められる資質能力」2015.
- (2) 保育教諭養成課程研究会「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドVI」文部科学省委託「幼児期の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」2020, pp.4-5.

図版

表1 武庫川女子大学附属幼稚園 令和3年度「5歳児V期 指導計画(10月下旬から12月)」

写真1~12 武庫川女子大学附属幼稚園 令和3年度「研究保育の記録」より転載

付記

本報告に係る研究・実践活動は、「武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻 倫理綱領」に基づき、当該幼稚園長の許可を得て実施したものである。本稿で用いた事例並びに写真は、当該幼稚園長の許可を得て掲載した。写真の掲載については、保護者の承諾を得ている。